

# チームネパール カンボジアミッション

2007年4月30日～5月5日

今年度は医師6名、歯科医師10名、薬剤師、柔道整復師など医療関係者を中心に総勢22名の医療団を結成し、子供達に教育の機会を与えるための活動をしているNPO法人School Aid Japanが建設した、コンポンチュナン州サムキマンチャイ郡 クランサモー村のクランサモー小学校、及びスワイチョロム郡 スラッカエル村のスラッカエル小学校において学校健診、公衆衛生教育、医療活動を実施しました。



カンボジアはポルポト派による徹底した知識階級への弾圧、虐殺が行なわれ、更に長く続いた内戦状態のために、医療教育機関、医療施設等も破壊され、現在も医療水準が低く医師不足が深刻な状況が続いています。社会インフラ整備の遅れたカンボジアの辺境地においては無医村が多く、たとえヘルスセンターがあっても医者が居らず薬も置いてない状況です。まずは多発する感染症を予防する為に医療公衆衛生の啓発を学校で行なうことにより継続的に学校の先生から生徒に指導する事が必要です。そして学校を地域の保健衛生の拠点とし、子供とその親を含めた地域住民に対しHIV等の感染症に対する正しい知識を発信する事によって、乳幼児死亡率を低下させ平均寿命を延ばす事が出来ます。

また、学校健診をきちんと実施し検診データを残す事が重要である事を、カンボジア保健省の大臣に提言し、昨年実施した学校健診の検診データの説明を行ないました。その事により今年度は活動当日に現地のクランサモー小学校まで直接保健省の副大臣を派遣して頂き、我々の活動に対してカンボジア政府より感謝状を頂きました。

今回、全校生徒に歯ブラシを配布し、1クラス毎にブラッシング指導と感染予防の公衆衛生教育を行ないました。その後歯科に於いては歯科検診後、生徒全員に対し虫歯予防のフッ素塗布、抜歯治療等を行ないました。内科に於いても内科検診後、寄生虫の駆虫薬の投与など治療を行ないました。また時間の許す限り地域住民に対しての診察治療も行なう事が出来ました。

前日に学校の先生との打ち合わせを行なっていた為、当日はスムーズに運営が行なわれ、800名程の生徒だったにもかかわらず予定時間内に終わる事が出来ました。また、健診終了後に学校の先生達と医療部会メンバーとの間で懇話会を開催する事で、生徒の健康状態、今後注意すべき事等をきちんとお話し出来ましたので、今後継続的に生徒に指導して頂けると思います。更に今回医療活動を実施した小学校には、子供服・ノート・ボールペン・サッカーボール等を寄贈し、子供達の教育環境の向上もお願いして来ました。

7回目となる空飛ぶ車椅子事業では、プノンペンから車で6時間、地雷がまだ多く残っているカンボジア北西部の町シソフォンにおいて、上院議員に車椅子を贈呈してきました。また贈呈式の際100名以上の地域住民に対し、歯ブラシ・コンドーム・食料等の配布も行ないました。

その他、プノンペン郊外のゴミ捨て場ステンメンチャイに暮らすスラムの視察を行なった際には、近くに小学校が建設されてはいるものの子供達が親と一緒にゴミ山の悪臭の中、ゴミ拾いをしている姿が多く見られました。また、最終日にはプノンペン市内のAIDS身障者孤児院の視察も行い、抗真菌剤等を寄贈してきました。

限られた短期間の時間でしたがこれだけ多くの充実した活動が出来ましたのは、国境無き奉仕団を初めとする支援団体の皆様、多数の協賛会社の皆様のご支援によるものと感謝いたします。



2007年度 日本青年会議所医療部会 部会長 静岡佳克

# ガリッサ地域洪水対策支援要請について

NGO ミコノ・インターナショナルより、NPO法人 国境なき奉仕団 ガリッサへ、ガリッサ地域の洪水被害に対する支援を要請された。

## ☆背景☆

昨年11月より12月にかけて異常気象のためケニア北東州は例年になく大雨が降り、タナ川上流のダムを放水したため、川の水位が急上昇しガリッサを含むタナ川周辺地域に甚大は被害を受けた。

ガリッサでは数千世帯の住人が住居を失い、「ヤングモスリム」「マドゴ小学校」「ヒュウガ小学校」「ファーマーズ トレーニング センター」「マドゴ高校」「NEP テクニカル」などの学校施設および校庭に避難し避難所生活を始めた。



## ☆洪水による主な影響☆

- ・ 数千世帯の住居の崩壊
- ・ 家畜の損失
- ・ タナ川周辺部の農地の崩壊
- ・ 5名の死者（確認済みの数）
- ・ 避難所となった小学校の閉鎖
- ・ 農地を失った人々の失業
- ・ 500人以上の農夫が中州部分に取り残され1週間後に警察のヘリコプターによって救出
- ・ ガリッサより北部、南部、東部の各町への道路の寸断により物資の欠乏
- ・ 感染症「リフトバレーフィーバー」の流行



## ☆現在の状況☆

1月に入ってから降雨は収まり、各学校を再開するために避難民の移動政策が始まった。

「ヒュウガ小学校」「NEPテクニカル」の避難民は各自元の地域に戻ったが、「マドゴ小学校」「マドゴ高校」「ヤングモスリム」「ファーマーズ トレーニング センター」の各避難民は再び被害にあう可能性が高いため元の地域に戻ることが許されなかった。

ケニア政府の政策としてこの地域の人々に対し、マドゴ地域の南側のブッシュ地帯を切り開き、家族ごとに新しい土地を分け与え新たな町を建設する方針を打ち出した。

1月6日より避難民の移動が始まり、「マドゴ小学校」「マドゴ高校」「ヤングモスリム」の避難民の第一移住地への移動が終了し、1月17日現在「ファーマーズ トレーニング センター」の避難民を移すために、第二移住地のブッシュを切り開く作業を進めている。

移住の完了した第一移住地では、水タンク3基の設置とパイプラインの建設が計画されたが、道が悪く深い砂地に阻まれトラックが侵入できず、やむなく移住地からやや離れた場所へタンクを設置し、仮設のパイプラインをつないだ。